



# 同推くん

発行 海蔵地区同和教育推進協議会、

事務局 海蔵地区市民センター Tel. 31-3284

## 2000年度 地区懇談会アンケートの意見から

### まだまだある差別意識

#### 今後の課題は正しい理解への楽しい学習

2000年9月22日から11月26日までに、7ブロックで地区懇談会を開催しました。同和問題啓発ビデオ「それぞれの音色」(太鼓の町に生きる)を視聴後講師による講話と質疑、意見交換を行いました。

会場で提出いただいたアンケートには、176人の方から回答がありました。

その中より載せさせていただきます。

- 日進月歩の世の中であるのに、なぜ昔のことにひきずられているのかわりません。
- 差別に屈することなく、明るく前向きに生きている若い人々の姿をみて感激でした。
- 自分より下の者がいると思うことで自分を少しでも優位に立たせようとする人間の心の弱さが、同和問題

を解消していけない要因ではないでしょうか、そんなふうにごろ感じます。

- 差別に焦点をあて、この地域で起こっていること、身近なことに重点をおき、一般の人が参加しやすい環境を作られてはどうでしょうか。
- 私も、間違った知識を親から話されて持っている人間です。今日始めて参加して、少しずつ間違いを改めていこうと思っています。

アンケートを全文読まれたセンターの瀬口猛男さんよりコメントをいただきました。

「あの家は昔、庄屋をしていた。」「私の先祖は水飲み百姓で……。」と同じ感覚で部落の人が「私の祖先は

部落で」と何の屈託も無い様子で語れる社会を望むわけであるが、その為には人々、特に子ども達に正しい知識を教育し続ける必要は残ると思う。

戻って「同和教育が却って逆効果にならないか」の意見ですが、これは正直言ってむつかしい。アンケートの中に「和太鼓の【怒】のチーム名にことさら部落を前面出しているようで嫌だ。」との意見があったが(地区懇談会でもありましたが)、人は誰でも多少の悩みを抱えて生きている。あまり部落部落と騒ぐなど言う反感がそう言わせるのだと思うが、ひとの感情はやっかいなもので、自分自身にあてはめても、反感、妬みといった感情は付いて回る。自分の行動が知らず知らずのうちに、感情に左右されていることはままあることだし、それを否定してしまうと、人間らしさそのものまで、失ってしまう。その上でその調整をどうはかってゆくか、と言うことだと思うが、厳しい差別を受けてきた現実を繰り返し繰り返し伝えてゆくことで、共感を得ていくしかないのかなと言う気がする。

#### ★第9回「人権を考える集い」アンケートから

2000年9月30日(土)「人権を考える集い」が開かれました。

演題は「支えあう人であるために」講師は家族社会心理学研究所 主幹・大田仁さんでした。参加者130名 アンケート提出者111名でした。その中より紹介させていただきます。

- 大田先生の講演は初めてでした。話しのテンポもよく、良かったです。人間の愛情というものの重要性、真理を考え直す、もう一度見つめ直すよい機会となりました。
- 講演会はあまり好きではありません。でも、今日の大田先生のお話は、最初から最後までとても興味のある、また、自分自身のようなことを言われてるんじゃないかなと思うほど、真剣に耳を傾けて聞いておりました。男の方なのに、母親の気持ちや感情がよくわかっておられるので驚きました。また機会があれば、もう一度聞いてみたいとおもいました。
- 少子化のなか、子どもを群れで育てていくこと、人間の存在に対する意識の根源を改めて考えました。

#### ★地域交流研修会開かれる。

2001年2月12日PM1時30分市民センターに於きまして神前同推協との交流会が開かれました。本音がでてきてなかなかいい交流会になりかけたとき、時間となりました。

神前同推協だよりより一部分紹介します。

「部落の人とも普通につきあっている」。。。というあなたへ

部落の人とも普通に話しもするし、差別ないとよく聞きます。その言葉のうらに差別意識がひそんでいませんか。部落差別を心の中に閉じ込めて気づかないふりをしてをして普通に話をしていませんか。

部落差別をぬきにしたままでは、本当の友達にはなれないし、つきあっていることにもならないのではないでしょう。

「言っではいけない」。。。と思っっているあなたへ

「私は子どもに何も言っへん」「うちの子はなにもしらへん」だから差別をしてないとおもっていませんか。私たち親が今不合理な差別のあることをわが子に正しくつたえること 家族で部落について考え語り合っっていくことが必要だと思っいます。

## 21世紀に持ち越した部落差別

会長 米川章

過去半世紀の間、部落差別を21世紀に持ち越すなという目標を掲げて啓発活動が展開されてきました。しかしその目標は達成されることなく、遂に21世紀に持ち込んでしまいました。

それは一体なぜでしょうか。同推協の啓発活動が稚拙であったのか、同和という言葉にアレルギーをもっている方が横を向いているためか、はたまた双方相まっつてのことか、いずれにしても残念なことです。

ご存知の如く21世紀は「人権の世紀」といわれています。これは「戦争の世紀」といわれた20世紀の反省の上になっつて言われているのですが、21世紀は「人権の世紀」にしなければならぬという世界中の人々の願望なのです。だまっつて手をこまねっつていては「人権の世紀」はきません。21世

紀はたっつた今始まっつたばかりです。人類の英知を結集して「人権の世紀」を実現させなければならぬということなのです。「人権の世紀」自由・平等・平和—なんという素敵な言葉でしょう。中味もぎっつり詰め込みたいものです。

最近「吾ら地球市民」という言葉がよく聞かれるようになっつましたが、それが現実のものとなっつたら素晴らしいことだと思っいます。

戦争のない平和な世界、みんなの人権が尊重され、自由・平等が保障される社会が実現できたら素晴らしいと思っいませんか。なるべく早く「宇宙地球市」の市民権を得たいものです。

しかしここでいくら「人権の世紀」と叫んでみても、現実に差別が残っつていてはどうしようもありません。世界に目を向ける前に先ず自分の足元をみつめてみましょう。

「日本人が日本人を差別する」おかしいと思っいませんか。例えどんな理由があろうと、これはおかしいのです。むろん、差別には色々な差別のあることはご承知のことと思っいますが、最も敵しい形で現れてくるのが、この部落差別なのです。部落差別は「生きる力を奪う」だけでなく、時には人を殺す力さえ持っつています。差別する側はそのむごさに気が付っつているのでしょうか。

部落の人はかわいそうだとか、気の毒だとかいうような同情は要りません。このような不合理がまかり通る世の中に義憤を感じ、一刻も早く、この

差別を無くすために力を貸さなければならぬという気持ちを持って行動してほしいのです。

すべての差別は「他を自分より下に見て安心、幸福を感じる」など誤っつた優越感からきています。人間は誰でも必ず差別心を持っつているはずですが、そういった自分の心のみにくさを直視できず、それを認めようとしなっつただけではないでしょうか。

何はともあれ、すべての人が「差別をしない自分」ではなく「差別できない自分」に変身できた時差別は無くなっつたと言えるのだと思っいます。

## 本の紹介

「あした元気に なあれ」

(部落に生まれてよかっつた)

松村智広 著

解放出版社 ¥1500

「人間ていいなあ」と思える世の中に—あとがきより

同和教育という、ついで“むずかしい”と言う言葉を連想する人がいるが、本当にそんなに“むずかしい”ことなのであろうか？

私は、同和教育というのは、「子どもと大人のつきあい方」であり、「人と人とのつきあい方」を“いかにくあたりまえにするか”ということだと思っつう。また、「人間として共に優しく生きたい」ということである。もし、それがむずかしいというのなら、今まで持っつてきた、いや、もたらされてきた価値観をかなぐり捨てて、新たな反差別の価値観をもつ。つまり、がんじ

がらめに縛られた人間関係を解き放つのである。もうそろそろ、目に見えない鎖をほどこうではないか。



松村智広

(まつむら さとひろ)

1957年三重県阿山郡伊賀町柘植(つげ)に生まれる。1981年立命館大学文学部英米文学専攻を卒業。1981年から中学校教諭。現在、三重県教育委員会派遣同和教育主事(ライトピアおおやまだへ派遣)、三重県同和教育啓発講師団講師・三重県生涯学習講師団講師、部落解放・人権大学講師など。

## 編集後記

今年度の地区懇談会は、講師として校区の小・中学校の先生方をお願い致しました。どこの会場も好評でした。また参加いただいた小学校の先生方が積極的に有意義な発言をされ、私たち役員もよい勉強をさせていただきました。海蔵小学校や山手中学校の先生方に厚くお礼申し上げます。どうも有難うございました。

